

## アホウドリと日本人の太平洋進出

平 岡 昭 利

最近、尖閣諸島をめぐる中国との関係が緊迫し、テレビの映像などで島々の姿をよく見るようになった。尖閣諸島は、島名の如く、尖った鋭い島という意味であり、いずれの島々も岩だらけで台風や高潮に襲われれば、人間はひとたまりもなく、到底、人が長く居住できるような島々でないことは一目瞭然である。しかしながら、明治期、この尖閣諸島を始め、人跡未踏の鳥島、南鳥島、大東諸島などに日本人が進出した。

では、なぜ何の目的をもって、日本人は命がけて絶海の孤島を目指したのであろうか、という行為目的を問題設定とし、領土の拡大と日本人の太平洋進出について講演を行った。

明治中期に「南洋ブーム」が起こったが、そこには、当初、領土とかイデオロギーという視点はなかった。カール・シュミットが、人間の海洋への進出の契機としてのクジラの重要性を説き、地球という空間に海洋を取り込んだ活動、いわゆる「空間革命」を演出したのは狩猟者であり、「鯨が彼らをお洋へと誘い出し、海岸から解放したのだ」と指摘したが、長い鎖国から解放された明治期、日本人の太平洋進出の原動力になったのは、意外にも「アホウドリ」という鳥類であった。

当時、太平洋（南洋）進出の起点は八丈島であり、その南方にある小笠原諸島が注目され、一獲千金をもちろむ人々が競って進出した。開拓初期にはウミガメやキクラゲなどの天然資源の略奪的な採取から始まったが、同時にアホウドリも捕獲され、その羽毛は驚くほどの高値で外国に輸出された。

これに目をつけた八丈島の玉置半右衛門は、1887（明治20）年、小笠原諸島の北、鳥島でアホウドリの捕獲事業を本格的に開始した。アホウドリは人間を恐れないこともあり、「撲殺」で簡単

に捕獲でき、その羽毛を横浜の外国商人に販売し、玉置は巨額の利益を得たのである。わずか数年で確固たる実業家になり、1896（明治29）年には全国の長者番付にも名を連ねた。

玉置の成功に刺激され、羽毛が莫大な富をもたらすと認識した人々は、競って太平洋に進出し、その彼方にはアホウドリが生息する「豊土」があるという無人島探検ブームが起こったのである。加えて、当時の地図や水路誌には、太平洋に数多くの疑存島が記載されており、アホウドリの生息するたくさんの無人島が存在すると考えた人々は、われもわれもと小船で海へ漕ぎ出したのであり、日本の大航海時代が到来したといえる。

アホウドリなどの鳥類を追った日本人の行動は、東はミッドウェー諸島を含む北西ハワイ諸島、南はマリアナ、カロリン諸島などの南洋群島、西は東沙諸島など南シナ海にまで拡大した。このような日本人のすさまじい太平洋への進出を「バード・ラッシュ」と定義した。

採取した羽毛や鳥類のはく製は、横浜や神戸から主にヨーロッパに輸出され、とりわけファッションの国フランスでは高値で売却され、帽子などの羽根飾りとして使用された。1911（明治44）年の日本からフランスへの輸出品の貿易額で多いのは、生糸、銅、樟脳に続いて「飾羽毛」が第4位の134万フラン（日本円で52万円）であった。

羽毛やはく製は、高価であるとともに軽量で運搬しやすいことから、鳥類の捕獲数はうなぎ登りで、明治～大正にかけて、日本からの輸出は年間に数百万羽にのぼり、大蔵省では最大捕獲数950万羽とみている。このように、当時の日本は「鳥国輸出大国」であった。

だが、3～4年も捕獲を続けると、目立ってアホウドリなどの鳥類は減少する。このため日本人

は、さらなる島々を求めざるを得ず、あるいは行為目的をアホウドリなどの鳥類から鳥糞（グアノ）、リン鉱に変化させつつ、空間的には一層拡大を続けた。

その結果、鳥類やリン鉱資源をめぐり、他の国々との摩擦や紛争が生じた。アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトは、日本人の鳥類密猟者の

侵入を防ぐため、1909（明治42）年「ハワイ諸島自然保護区」を設定した。

本講演は、日本人の太平洋進出や日本の領土拡大を、アホウドリをキーワードとして、その行為目的や行為の主体、行為空間の変化というフレームワークにおいて、新たな視点による太平洋の歴史地理の構築を試みたものである。

（下関市立大学）